

答えはすべて解答用紙に書きなさい。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

自分の気持ちを言葉にする、という行為は、自分への「暴力」でもあると思っています。言葉はそこまで、柔軟なものではない。いろんな人が、いろんな人生を生きて、見つけてきた感情がどれも同じはずはないのに、「好き」「嫌い」「ムカつく」「うれしい」、①言葉にすればまるですべてが同じ形をしているみたい。本当は、その人の言葉でしか、その人の感情は表せない。本当は、新しい感情を語るためには、新しい言葉を探していかなきゃいけない。けれど、そうしたら伝わらなくなるから。「わからない」「意味不明」「わかるように喋って？」だから私は、「言葉にしてこそ、相手に伝わってこそ、自分の感情に意味があるんだ」と思いはじめていた。学生時代、誰かと気持ちをシェアしたい、一緒に喜んだり、悲しんだりしたいって、時もあるし、だから必死で共感を求めた。けれど、それって本当に、思いのすべてを理解してもらわなくちゃ、できないことなんだろう？

何一つ伝わってないな、と思うことは多かった。話し方が下手なのか、コミュニケーション能力の問題か、教室で友達と話していても、私の言いたいことはほとんど伝わっていない、と思うことが多かった。友達の言いたいことも、多分私は理解できていない。でも、その場のノリとか、勢いとか、そういうものによって会話は流されて、一言一言をAセイサすることなんてない。いや、そんなの誰ももう求めていないのだ。「あ、それいいよね」「わかる」「まじそう」そう繰り返していくことで、時間も一緒に流れていく。一緒に話していれば、一緒にいれば、それだけで湧く親しみというのがある、たとえば友達の話したいことがわかっていなくても、友達はそれでも私と一緒にいたいと思ってくれし、私もそれでいいと思っていた。

その場が盛り上がりやすい、という会話の仕方は、中学から高校にかけて激しく、流行のもの、テレビ、音楽について話していれば大体のことはやりすごせていた。それぞれが違うことを言っている、テーマがそこにあれば、まあなんとかなってしまふ。部活動とか、先生とか授業のこともそう。何かを褒めたいとか、何かを貶めたいとか、大きな方向性が定まっていれば、それに従いつつ、みんな意外と好き勝手に話して、そうしてそのほとんどがスルーされていくんだ。「わかる」とか。そういう言葉が受け流していく。小説やドラマみたいに、セリフすべてに存在意義があるわけではない、と当時の私はよく考えていた。早口で言えば誰もが聞きもらすし（それでいて聞き返すようなこと誰もしないし）、ぱっと聞いておもしろくなかったら「ていうかさ」って違う話になったりする。言葉は使い捨てられていく。多分、ドラマとか漫画では、省略されてしまふやりとりだろう。きっと、物話など何もない私たち。そんな私たちの会話では、言葉がわざわざにされていく。「何を言うか」より「誰と話すか」の方が大事で、「どう話すか」「どんなテンションで話すか」が大事で、だから相手の言葉を正確に拾おうとはしなくなる。親しい相手になればなるほど、そうだった。言葉は、そばにすることを知らせる、Bテキスト連絡みたいなものだ。

それでも一つだけルールがある。

「わけのわからないことを言って、場を凍らせるな」

一緒にいるだけで、なんか話しているだけでOKの場。それを壊すな。だってこれこそが平穏だから。場のために、私たちは言葉を選ぶ。わかりやすいように、伝わりやすいように言葉を選べけれど、相手に自分を理解してほしいからそうしているのではないのかもしれない。誰ももう、理解しようとしてなくて、だからこそ、「なにそれ？」ってなるようなことは言っていない。」「わかる」「っていうのは、流してしまっただけでOKなこと。そうやってささささ通りのいい会話をして、時間をやり過ぎしたい。別に、悪いことではなくて、そういう退屈だっただけだ」とは思うのだ。

けれど、私は耐えられなかった。自分の気持ちをそぎ落として、わかりやすい言葉に無理やり、あてはめて、そうしてだんだん、私は何かを捨ててきてしまっているのでは、と思い始めた。「わかる」と言われたらほっとする。みんなも自分もくつろいでいる空間は、私だって、壊したくない。けれど、語る言葉が「Cタテマエ」であろうとも、声にするたび、そっこのほうが「本当」であったように感じてしまふ。自分が本当はどう思っていたのか。誰とも話さず、言葉にもせずにいたら、だんだん忘れてしまふんだ。

最適化されていく。みんなにわかるように話すことで、みんなの知っている言葉を使うことで、その言葉に合わせるように自分という人間も、最適化されていく。みんなに「わかりやすい」人間になる。場を壊さない人間になる。でも、それだけだ。場の要素でしかない私。ここに自分がいたってなくなっちゃって、同じだと思った。誰にだって共感される人間なんて、すべてが「わかって」もらえる人間なんて、そこにいる意味がないとも思った。全く別の家で、全く別の人生を生きてきて、わかるはずなんてないのに。「わからなさ」にこそ自分がある、思うのに。それなのにそれらすべてを捨ててしまっている気がした。「わかる」と言ってもらいたがために。でも私は、やっぱり人は、「わからないけれど、でも、なんか好きだよ」「なんか嫌いだよ」、そういう感情でつながっていくものだと思った。だから、きっと、話し言葉以外の「言葉」を探し始めたのだろう。

中学生だった頃、私はインターネットで日記を書き始めていた。友達にはまだネットに詳しい子がそんなにはいなかったけれど、でも、ネットにはすでにたくさんWEB日記が存在していて、そこでは現実の人付き合いなんて、全く関係ないみたいだった。また、個人の書いた言葉、というものは、耳で聞く言葉と大きく違って見えたのだ。言葉より優先される「場」がないから、言葉が、話し言葉よりもずっと、ごろっと目の前に現れている。ノリで流すことができない。スルーができない。わからない言葉は、わからない言葉のまま存在感を発揮し、私はそれが羨ましかった。「わからなくてもいい」と思って言葉を書けることが魅力的だった。

とりとめもない思考回路。それを、ただ言葉にしてぶつけていった。友達に話しても「は？意味不明」と言われるようなもの。だけれど、言葉と体が結びついて、言葉を書くことが、体をぎゅっと丸めたり、思いっきり走ったりすることと同じように感じられた。次の瞬間に自分が何を書こうとしているのか、わからない。理性とか、そんなものを置き去りにして、私の感情が言葉を選び、そのうち、感情すら置き去りにして言葉が暴走していく。感情というより、反射Dシンケイで言葉を書いている感じだった。わかりやすい言葉ではなかったけれど、その言葉の手触りにこそ、自分というものが存在している気がしていた。

次第にそれを読みたがる人が現れて、「書く言葉」だからこそ、受け入れられる「わからなさ」があるのかな、なんてことを思った。話す間はどうしても、相手の顔が目の前にあり、周りには空間があり、空気があり、それまでの雰囲気（ぶんき）を崩さないように、言葉を選ぶ。言葉より場が優先されてしまふのは、「コミュニケーション」としては当たり前のことなのかもしれない。②けれど、書いた言葉は、ネットの海にある言葉は、どうだったのだろう。当時の、個人サイトが点在しているようなインターネットでは、まだ言葉はどれもがひとりごとで、コミュニケーションを前提とはしていなかった。「わかってもらおう」なんてこと、考えなくてよかったんだ。だって、相手の顔は見えないし、互いがどういう環境でそれを書いているのか、読んでいるのかも知ることができない。言葉の手触りだけが生々しく、やってくる。そこにしか、「人」の気配がなかったんじゃないだろうか。

よく知らない相手なのに、同じ言葉を話している。けれど、あきらかに、自分とは違う言葉選びを相手はしていて、相手の背景にあるものは何一つ見えないのに、その「異物感」に相手の生きてきた痕跡を感じる。言葉のすべてがわからなくても、言いたいことがなんなのかわからなくても、その「異物感」に

ときどき、ぐつときたり、むしろ嫌悪感を抱いたりする。言葉が「人」を伝える瞬間だと思った。「わからなさ」に「人」が宿る瞬間だと思った。そういう言葉を、私はずっと書きたいと、思っていたんだ。

ネットに書いていた言葉には、次第に読者が現れて、そうしてそれを「詩みたいだ」と言う人が現れたことで、私は「詩」を発表するようになった。これが、私が詩人になったきっかけだったと思う。

詩は、私にとって、「わからなさ」に宿るものです。わかってもらいたい、という感情を抱いた途端、その言葉は詩ではなくなる、と思っています。読んで、その詩を「好きだ」といつてくれる人も、それぞれが違う解釈をしていたりする。彼らがどう読むかなんて私にはコントロールできないし、それでも、届くものがある、ということが私にとっては大切だった。読み手と書き手が、完全にわかりあう必要などないのだろう。わからないけれど、でも、だからこそ強く残る手触りがあり、それこそが「詩」なのかもしれない。それぞれが、自分自身の中にあるものを、そこから思い出すのではない。共感や、わかってもらふ、ということを追いかけて、忘れ始めていた自分の「本当」が、奥にまだ眠っていることを思い起こすのではない。もしかしたら、そんなことを、最近、考えています。

実際のところはわからない。わからなくて、いいと思う。③ただ、私が書いた「わからなさ」が作品として、誰かに届いていくとき、私は、書いていてよかった、と思う。こんなことがあるんだ、いつも驚かされている。こんな瞬間があるなら、いつまでも、いくらでも、書いていけると、そのたびに、思う。

(最果タビ「恋できみが死なない理由」)

問一 □ AとDのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 線部①とはどういうことですか。くわしく説明しなさい。

問三 — 線部②とありますが、筆者はなぜ「書いた言葉」で表現しようと思ったのですか。

問四 — 線部③で述べられている、筆者が詩を書く喜びを説明しなさい。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

◇次の文章は、「鶴来」という会社でジーンズ製作に一生をささげてきた「りよう」が、年をとってから、孫の「静」に自分の人生を振り返って話をしてしている場面です。

「ねえ、りようばあちゃん。もう一つ、教えてくれる？」

「なんじゃ。なんでも聞いてええよ」

「そうやって鶴来は、ジーンズで新しいスタートを切ったのに、りようばあちゃんは、なんで鶴来の家を出て、神戸に来たんじゃ？」

「その話も、まだ静には、しとらんかったのう」

りようは視線を遠くに向けた。

「注1 光太郎じいちゃんは、注2 エミリー・スミスのジーンズを見た、その一ヶ月後に亡くなった。五十三歳で、あたいは五十五歳じゃった。それからあたいは五年、六十まで鶴来におった。で、六十になったとき、あの家を出ようと思った。鶴来はもう注3 久志が社長になつとったし、会社は久志に任したらええ。あんたも、もう大学生になつとったしな。それもあるけど、一番の理由は、もう鶴来には、注4 恭蔵さんもおらん。光太郎さんもおらん。あたいにとって、鶴来における意味は無くなったんじゃ。それで、あの家を出て、新しいことをやるうと思うた。そう決めたんじゃ」

「その、新しい人生が、なんで神戸やったんじゃ」

「そうは決めたんじゃけどな。次に何をやるうか、何も決めとらんかった。そんなことを考える暇もなかったしな。ただ、これまでは違う人生を始める。それだけじゃった。挨拶回りに、これまでお世話になった取引先を全部回った。それで、神戸の取引先が、元町にあっての。神戸の港のすぐ近くの街じゃ。挨拶が終わって、元町の商店街を一人で歩いた。そうしたら、一軒の書店の

看板が目に入った。茶色の外壁にオレンジの文字で、『海会堂書店』って書いてあった」

「カイエドウ？」

「海に会うで、海会堂や。あたいは、ええ名前じゃなあ、と思うて、港町のその書店に入ってみたんじゃ。商店街の中の本屋にしては、結構広い店やった。百坪近くはあったかなあ。二階だてでな、平台や棚を見た、品揃えが、他の書店とは違う。女学生の頃、倉敷の古書店で働いたことがあったからな。もともと本が好き、本屋が好きじゃから、そういうのは、ちよつと見たらわかる。ええ書店には、ええ書店の匂いがするんじゃ。古書店なんかは、店主の色がそれぞれ棚に現れて特徴があるもんじゃけど、そこは新刊の、しかもそこそこ大きい書店じゃのに、棚に表情があった。何より、店の名前からして、表情があるじゃろう」

海会堂。確かにいい名前だ、と、静は思った。

「通りがかった若い店員に、ええ名前の店ですなあ、て言うたら、ええ、よう言われます。海に会うで、海会。私も好きです。それと、カイエっていうのは、フランス語でノートとか、練習帳っていう意味もあるらしいですよ、って教えてくれた。あたいは、ますます興味を持ってね。それで、二階に上がってみて、びっくりした。船の本が、壁一面に、ずらつと置いてあったんじゃ」

「船の本？」

「そう。商船から軍艦からヨットからボートから、あらゆる船に関する本。歴史やら法律やら造船やら船舶免許の参考書やら、ロープの結び方の本とかまでね。何本もの棚に、ずらつと」

「港町の書店じゃから、船関係のお客さんが多いんじゃろうかのう」

「そういうことじゃあろなあ。それにしてもえらい充実ぶりじゃった。それで、あたいはその時、思い出したことがあった。子供の頃、浅草におった頃のことじゃ」

そこでりようは、母親との思い出を語った。

「母親と、いっぺんだけ、凌雲閣ちゆう、高い展望塔に登ったことがあったんじゃ。十二階の展望台からな、ぎょうさんの海に浮ぶ船が見えた。そのとき、あたいは、母親に聞いたんじゃ。あのお船たちは、どこから来たの？ どこ行くの？ っ。母親は、あたいに言った。遠い遠いところからだ。遠い遠いところへ行くのよ。あたしも、船に乗れるかなあ、そう言うあたいに、母親は、ああ、大きくなったら乗れるよ。りよう、おまえは、大きくなったら、どこへでも行け。この街を飛び出して、あの船に乗って、自由に、どこへでも行けばいいんだよ。突然、ふつと、そんなことを思い出したんじゃ」

静は祖母の話に聞き入った。

「①それでな、あたいは、二階におった、店員に聞いた。この店の社長はどこですか。そうしたら、店員が教えてくれた。あそこで、ノコギリ持ったんのが、社長ですよ。見たら、店の奥の方で、作業服で材木をノコギリで切つとる人がおった。あの人が社長か。なんで社長がノコギリ持つとるんですかって聞いたら、社長に聞いてみてくれって。それで、あたいは、近づいて社長に言うたんじゃ。手伝いましようかって」

「いきなり？」

「そうじゃ。おまえも覚えとき。初めて会った人と仲良うなろうと思うたら、その人のやつのことを手伝うことじゃ。社長は、一瞬、はあ、ちゆうような顔をしたらけどな、それやったら、ちよつと、この材木の端っこ、持つといてくれるかなあ、って。それからあたいは、しばらくその、日曜大工みたいな作業を手伝ったんじゃ。作業が一段落したとき、社長があたいに言った。えらい助かりました。ありがとって。それで、この工事は、何してるんですか？ っ。社長に聞いた。その時の会話は、今でも、忘れられなあ。社長は、あたいに、こう言うたんじゃ。ああ、これですか。ここは社長室やってんけど、そんなもんいらんなあ、いうことで、取り壊すことにしたんですわって」

「社長が、社長室を？ 取り壊してたの？」

「そうなんじゃ。不思議じゃろ。壊して何にするんですかって聞いたら、『ギャラリーを作ることにしたんですわって』って。『ギャラリー？』思わず聞き返し

たら、社長はな、人懐こい笑顔で言うたんじゃ。『自分の目で見て、ええなと思  
った、まだ無名の画家の絵の企画展と、販売をやろうと思ってます。会社の  
みんからは、無謀やか、Aドウラクとか言われてます。それで、まあ、私  
が一人で、こうやって』って」

「絵の企画展？ 販売？ 本屋さんで？」

「あたしもそのとき、同じことを社長に聞いた。そしたら社長は、こう説明し  
てくれた。今はたしかに、本の売り上げは好調やけど、これからの書店は、い  
ろんなことをやっていかんと生き残れん時代がきつと来る。そこで今、大型の  
美術本が、結構売れてるから、絵を売ることで、絵の好きなお客さんに『ア』  
を運んでもらえるような、そんな書店にしたいって。今は、船の本が『イ』  
になってるけど、もう一つの書店の『イ』を作りたいって」

「面白いことを考える人じゃね」

「そうなんじゃ。あたしも、面白そうじゃ、と思った。それで、あたいは、社  
長に言った。『ここで、働かせてください』って。そうしたら、社長が、急に真  
面目な顔になって、あたいの目をじっと見て、言うたんじゃ」

静は身を乗り出して、りょうの言葉に耳を傾けた。

「もちろん、ここでギャラリーをやるのは、ビジネスのためです。そやけど同  
時に、それは、大げさに言うたら、その作家の、生き死にに関わることもあ  
るんです。それから、精魂込めた作品の、生死に関わることもあるんです。  
まあ言うたら、私は、医者みたいなもんです。それだけの責任がある。あな  
たに、それを負うだけの覚悟がありますか』あたいは、答えたよ。『それを聞い  
て、余計やりたくなくなりました』って」

そうして、りょうは、その海の近くの書店で働くことになったのだという。

「けど、りょうばあちゃん、その時、六十じゃろ？ よう、雇うてくれたね」

「もともとその書店は、Bネンパイの書店員さんが多かったんじゃ。客層に、  
ネンパイのお客さんが多いから、お客さんからしたら、自分と同じ歳ぐらいの  
店員がおった方が安心してくれるっていう考えてね。六十を越えた店員が、す  
でに三人も働いとった。それとね、社長がギャラリーやる、言うた時、社員は、  
みんなそこに配属されるのを嫌がったんやて」

「なんでじゃろ」

「そりゃあ、みんな、本を売りとうて、書店に勤めてるんじゃけえ。やっぱり、  
文芸書とか、人文書とかそういうのを売りたいんよ。社長も困つとったんや。  
無理に配属して、いやいや働かれてもなあ、って。そんな時に、ひょっこりあ  
たいが現れたってわけじゃ」

「じゃけど、りょうばあちゃん、美術のCソヨウはあったの？」

「ない、ない。若い頃、好きじゃった、いうても、竹久夢二とか、中原淳一  
とか、そういう時代じゃからねえ。最近の画家のことなんか、からつきしじゃ  
けえ、必死で勉強したよ。美術の専門雑誌とか読んだり、方々の展覧会に

「『ア』を運んだりね。そんなあたひを見て、社長、その人は、杣田さんて  
いうんじゃけど、三十五歳で、私より二十五歳も下の、杣田さんが言うた。り  
ょうさん、勉強もええですけど、もっと、大事なことがあると思うんです、っ  
て」

勉強より大事なことって何だろう。静はりょうの言葉を待った。

「相手が命を懸けて向かいおうとるものに、どれだけ気づけるか。有名より無  
名。正統より異端。中心より辺境。そこに眠ってるものに、どれだけ共感する  
力を持つてるかです。僕らの、生き方そのものが問われるんですって、杣田さ  
んは言うたんよ。杣田さんのその言葉を聞いて、②あたひは、美術の雑誌を閉  
じた。そうして、時間はかかったけど、ギャラリーは海会堂書店の大事な柱の  
一つになった。当時無名やった作家を何人も見いだして、店の売り上げにもつ  
なげた。そうして、あれは、いつやったかな、そう、ちょうど、ベルリンの壁  
が崩壊した年」

「ああ。一九八九年。高校三年の年じゃったから、よう覚えとる」

「そうか。その年か。あんたにはそんなこと言うてなかったけどな、その年の  
暮れにね。杣田さんが、社長を解任されてね」

「解任？ ギャラリーで会社を立て直したのに？」

「そう。もともと、海会堂書店は、同族企業でね。創業者の子供が、三人、お  
った。息子が二人と、娘が一人。普通なら長男が次男が継ぐんじゃけど、いろ  
いろあって、娘の婿さんが継ぐことになった。それが杣田さんや。もともと勤  
めてた、大手の重工業の会社を辞めてな。まあ、そういうこともあって、社長  
になってからも、社内での杣田さんの立場は、いろいろと難しいところがあつた  
んじゃ。で、結局、息子さんじゃっぱり継ぐことになって、杣田さんは、まあ  
言うたら、お払い箱になってしもうた。それで、十三年ほど続いた、二階の海  
会堂ギャラリーも、春に閉めることになって。そうなったら、私も、海会堂に  
おる意味はない。どうしようか、と思うてたら、杣田さんが、言うたんじゃ。  
りょうさん、僕は、ここ辞めても、ギャラリーをどこかで続けよと思ってるんや。  
これまで関わってきた画家は、ほとんど無名の頃に知りおうて、今はもう身内  
みたいなもんや。伴侶みたいなもんや。僕は、彼らの『居場所』を失いとうな  
いんや。作品の『居場所』を失いとうないんや。りょうさん、もしよかったら、  
僕を手伝うてくれへんかって」

「③居場所。その言葉が、静の心に突き刺さった。」

遠い昔、幼い頃に浅草から出てきた祖母が、社長をお払い箱になった男と、  
神戸の片隅でギャラリーを聞く。それが二人の『居場所』となる。人生は、そ  
して人と人とは、なんと不思議な縁が繋がっているのだろうか。

(増山実『百年の藍』)

※設問の都合で本文の表記を変えたところがあります。

注1…りょうの夫で、鶴来の社長

注2…鶴来の会社で作ったジーンズのブランド名

注3…光太郎とりょうの次男

注4…光太郎の叔父で、りょうの育ての親

問一 ☐ AとCのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 「ア」「イ」に入る体の一部を表す漢字一文字を答えなさい。

問三 線部①の理由を、この時りょうが神戸に来たきっかけをふまえて、  
説明しなさい。

問四 線部②とありますが、この時のりょうの気持ちを説明しなさい。

問五 線部③とありますが、「居場所」という言葉が「静の心に突き刺さっ  
た」のはなぜですか。

受験番号

には記入しないこと。

( )

[illegible]

| 問一 | 問二 | 問三 | 問四 | 問五 |
|----|----|----|----|----|
| A  | ア  |    |    |    |
| B  | イ  |    |    |    |
| C  |    |    |    |    |